

# 汲古一紙

## 『こんな教育もあった』(二)

中村素堂

翁の答えはこうだ——ぼくらの小学校時代の修身教科の中では、しよつちゅう金子先生の行実の立派なことが説かれて、処生の信念を養われた。その金子先生の彰徳碑の建設とあつて、小学生は全部あの大きな基礎の大石をいくつも城の下から城址へ引き揚げる綱曳きを手伝わされた。町の世話人、小学校の先生、父兄もみんな手伝つて掛け声をかけてくれ、あの礎石を据えて碑が成り、郷里の偉人讃仰を肝に銘じて知ることが出来た。同窓相寄れば必ずこのことに触れていたのに、戦争に敗けてみるとこの銅碑は忽焉として姿を消し、残礎だけが残っている。

昭和二十年、かつてこの石を引き揚げた少年たちはみな七、八十を算える歳になり、功成り名遂げていた。ある席上でこの老人達が、もう一度われわれの力であの碑の方を再現しようとい決すると、ことは快調に運んだ——と眼をうるましての懐古談まじりの説明には、いい話だナ——と私も大変感動させられた。

祝賀式のあと、上山市の教育委員長から、何かご感想を——と頼まれ、躊躇なく立った私は、実行を伴つたかつての教育が、その効果を挙げた偉大な姿のひとつがここにある。碑もいよいよ建つた。これからこの碑をどう利用するかで、その意義はさらに大きくすることもできる。建てっぱなしで風雨に曝しておくだけでは勿体ない——といった。

そして私はふとあの春雨庵のことを思い出した。この月岡城址の下に、もう四世紀近くも経つた春雨庵という小庵の跡があつて、そこに往年の建物を東京から移築したのもこの時であつた。かつて沢庵禅師が徳川秀忠によつて罰せられ、上山に流罪の折、当時の城主はひそかに沢庵和尚を慰め、この小庵を作り四時の遊行にも大いに便を与えていた。二代秀忠が薨すると、三代家光は丁重に沢庵を迎

え、品川に大伽藍東海寺を造営して沢庵に江戸留錫を懇請した。和尚の曰く、こんな立派なものを造営していただいて有り難いことだが、小なりといえども上山の春雨庵には及ばない。と、家光の天命をもつて上山藩は春雨庵を解体して江戸に運び、東海寺の境内に立てられた。それが昭和二十年かに、上山市民の懇囑によつて、再び解体運搬されて往年の地に建てられた直後であつた。

私は続けて、あの小庵の建物に沢庵和尚は藩侯の温い心情をくみ取つて、將軍の前でもはばからず放言し、今日になって再び故地に小庵が戻つて来たのも大変うれい話である。教育委員長様はじめご有志のみな様方、どうかこの今日の目前の式事の裡にあるもの、人間の美しいものを感発する姿を利用下さるよう、祈つてやまない——といった。即席料理みたいでもあるが。

教育委員長は、読まない本のようにしては申し訳ない。漢文の原碑を現代文にまでして下さつたし、あとはわれわれの云々といううなこと結ばれた。

これが縁になつてまた一年おいて、「上山温泉開発五百年記念碑」がなり、他にも何か遺すことができた。

さらに後年、私は拙い歌集『ふぢばかま』を刊行したので、一冊を西川寧先生に呈したところ先生から、その歌集の中の金子先生碑再建除幕の歌で思い出したが、父春洞の書いた碑はどうなったのか、(これはすでにご承知の筈だったが)その拓本はどこかにないだろうかとのお問い合わせて接した。

その拓本は再建当時にでも入用で探したが見つからず、写真と印刷で間に合わせてしまった次第をお答えした。お持ちの方があられたら、西川先生にでも私にでもご一報いただけたら幸甚である。

羽鳥翁は、日本のラッセルの発明者で正式には羽鳥式除雪機関車と呼ばれたが、SL廃止でどうなったか。また棧橋で列車編成のまま連絡船に積込む棧橋、船倉の設計など伺つたが、これを人に伝えることもできないほど、わたしはこの方面の知識がないのである。

『筆間雑記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。 (『書範』昭和五十七年三月)